
平和な国のとある末路

如月遼太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和な国のある末路

【Nコード】

N8135Q

【作者名】

如月遼太

【あらすじ】

平和はあるべき姿で。混沌もあるべき姿で。

現代にて、『平和で当然の生活』が根底から覆されたら？

自らの持てるものが無用の長物と化した世界になったとしたら？

そんな疑問を、ただ表しただけの作品

終わりと歩き出すその前に（前書き）

この物語はフィクションであり、登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです。

終わりへと歩き出すその前に

高校生というものは、比較的体力もあり、行動力もある。知性もそれなりにあるといっても過言ではないだろう。

『若い』というのは、一種の武器だ。

論理より直感、努力より才覚で物事を押し切る事が多く、完成された大人たちに比べて、驚くべき結果をだす事も少なくない。

また成人に比べて、無駄ともいえる程に物事に対して傾倒する集中力もある。

勉学は日本において義務教育が課せられているので置いておくとして、音楽、スポーツ、武道、ゲーム、現代の日本に於いてはやや娯楽の色が強いが、何かしら一つに触れ、興味を持つことは平和な国で生まれた若者の生活そのものだ。

しかし、その中で才能を見出し、開花させるのは一握りしかない。

音楽の才能を持つものは毎週テレビで歌い、スポーツの才能を持つものは毎週テレビでボールを蹴り、武道の才能を持つものは毎週とは言わないが定期的にテレビで相手を殴り、ゲームの才能を持つものは毎週ばかりか毎日テレビの電源を入れる。

平和な、しかし当然な生活。

ただ、考えてみて欲しい。もし、この『平和で当然の生活』が根底から覆されたら？

なにか強大なもので今、「退屈である事が幸せだったー」なんて昨今の小説で使い古されたフレーズを、今まさに僕が考えているこの世界がなくなってしまうとしたら？

そんなスポーツやサブカルチャーがまったく役に立たない、純粋な『生存能力』が問われる、テレビの奥でしか見聞きできないような世界が降りかかってきたとしたら？

ありえない。

日本という国は相当恵まれている。まず、水がある。道端に置いてあつて飲める。しかも無料。これだけで世界の3分の1以上の国より恵まれている。

経済大国アメリカでさえ水道水は基本的に飲まない。飲むのは店で販売しているミネラルウォーター類だ。

さらに日本はインフラが整っているばかりでなく、10m歩けば自販機がある。30m歩けば飲食店がある。100m歩けばアパレルショップが、1km圏内には家電量販店、娯楽施設まである。

田舎となれば少し話しが変わってくるが、要は『望んだものが基本的に手に入る』ということだ。付け加えて言えば、コンピュータネットワークが世界で一番発展しているため、ネット通販などを利用すれば、更に敷居が下がり『死にくさ』に拍車が係る。

別の視点で見てみる。

日本人であるというのも世界的に見てかなりのアドバンテージである。性格がいいとか思いやりがあるとか勤勉であるとかも確かにあるだろうが、圧倒的で日本という国に住む人を示すパラメータは『識字率』ほかない。

日本人にとっては『識字率』というより『読み書き』と言ったほうが分かりやすいかもしれない。ともかくこの『識字率』だが、日本に於いて異常に高いと思えるシュチュエーションを例に挙げてみる。

『駅前でホームレスが服を着て、甘酒を片手に新聞を読んでいる』

この光景は世界のおよそ7割の国で見ることが出来ない。日本人の生活水準を分類して、およそ最下層である浮浪者、ホームレスに字が分かる。それだけでも異常なのに、基本的に物乞いをしない。なぜなら、字が分かり自分のいる立場も把握でき断片的に世の中の流れも分かり「日雇い労働者募集！日当8千円！」のチラシも読む事が出来る。

『生きる』という大前提が諸外国のように、手探りではなくすでに答えが出ている。

形振り構わず生きようとするれば、おそらく世界でもっとも死ににくいであろうことは、日本の識字率は98%以上という数値をみても不思議ではないだろう。

ついでに、アメリカやヨーロッパ諸国なども識字率は90%を越

えるが、日本のように学校で1人や2人外国人がいれば珍しい半鎖国的な国ではなく、移民など多種多様の人物で構成されているため、実際には「今住んでいる国の言葉や書面を理解できるか？」となると急激に下がって50%ほどになり、言葉を理解できない、字を理解できない、『字を理解する』という言場すら読めない、字を学ぶ教育機関さえ満足になく、スラム街に行けば字も満足に覚えなйма『アーメン』なんてザラだ。

またアフリカ諸国となるとまず2人に1人が普通に字を理解できない。

いや、理解する必要がない。

字よりも学ぶべき事は、その日を凌ぐ生活の知恵、宗教上の掟を一刻も早く理解する事と、7.62mmの弾丸を素早くマガジンに込め、碌に整備されていないAK47自動小銃の模造品の扱いに慣れて、宗教戦争に駆り出されることである。

そしてそれらの武器の価格が日本の相場で5000円以下。AK47の装弾数は30発で破壊力の高い7.62mm弾を使用しており、仮定ではあるが2発で人を殺害できるとすると、15人の前夜祭一（プロテストメントに於ける通夜の意）を準備しなければならぬ。

単純に計算してアフリカ諸国の『命の価値』は333円。

実際には撃ちもらしや制圧射撃（足止め、相手を逃がさないようにする威圧射撃）や、弾薬の値段も考慮して、1人1000円あたりだろう。

日本で少し良質な定食屋にでも入れれば30分後には支払う料金で、

ソフトドリンクなど頼めばもちろん足りなくなる。

それほど、命は軽い。

もし、発展途上国で巷を騒がせている『ケータイ小説』が配信されたとして、感動し泣く人がどれほどいるだろうか？（日本ではこんなくだらない事で泣けるほど平和なのかと泣く事はあるかもしれない）

彼らは自分の国、街、村で世界が完結しており、比較対象がない。教えられない。字が読めない。信じられるのは自分の親が熱心に神にお祈りする『宗教』のみ。国の上層部もへたに字を教えることなく国民の可能性を削いでゆく。

あるものは世界的なミュージシャンになれたかもしれない。あるいはプロサッカー選手になって世界を飛び回っていたかもしれない。

『努力する者に神は微笑む』等と言われてはいるが、日本ではギターを学びたければ1000円前後のギター教本を片手に努力すればいい。だが彼らは、『おおよそ全世界の半分以上の人間』は、字を知らないが故に、努力すら出来ない。努力のやり方を知らない。

出来るのはなんだかよく分からない『えらい人』の言う事を聞く事。『えらい人』が『えらくない人』になったら、5000円で買った玩具で『処理』する事である。

さすがに彼らの信仰する『神とやら』も、殺人以外で微笑むことが無くなって、今もアフリカの神は笑っぱなしの生活を送っている事だろう。

そして恐ろしい事に「いや可笑しいだろ？」と思う方がマイノリティである事、発展途上国では当然（或いはしょうがない）の事と

して受け入れている事だ。

日本と比べてどちらが『恵まれているか?』など、飛行機と泥水を比べているぐらい滑稽だ。

そもそも前提が違う。思想が違う。感情が違う。国が、病気が、衛生が、建築物が、法律が、文化が、声が、肌の色が。そして戦場が違う。

彼らは未だに旧石器時代を引き伸ばしたかのような戦いを続けている。自分たちが信じているものを壊されないように必死に戦っている。

政治なんか関係ない。領土とかそんなものではない。そして自分たちは『おそらく人間』であると漠然に思いながら生活している。

それに比べて先進国に住む僕らは、法事なんて面倒なものだし、冠婚葬祭だつて「何で金払わなくちゃならねーんだよ」とか思いつつ、ニコニコしながらおめでとう!と言い、ゲームでレアアイテムが出ない事に憤慨し、パソコンで無料AVを見ながら自慰を繰り返し、仕事で上司に叱られれば98%殺されることの無い国で「死ぬ」と呟き、さらに失笑を買うのがそこまで言っておいて結局死なない人間が大多数という、ずうずうしくも『命の価値』を高騰させすぎた現代の日本人だ。

今更、命を大事になどといわれても、事故か自殺か病死しか死ぬ手段がない先進国、特に日本に於いて

「そうだね、信号では右見て左見て、もう一度右を見てから渡る

う。車を運転する時も必ず法定速度を守るし、1 kmでもオーバーしたら僕はその日から車を降りるよ、免許証を破り去って車はその日の内にスクラップ工場に持って行こう。飛行機や電車なんてとんでもない！ 他人に命を預けるなんて恐ろしい事なんて出来やしない。それをするくらいなら部屋から出ないよ！ 食事にも気をつけよう。ファーストフードやコンビニ等の食品は身体に悪いから食べないでおこう。毎日、無農薬野菜やちゃんと管理された安心のお肉を食べる事にするよ。ゲームも娯楽が無いと暇になっちゃうから、禁止とまではいかないけど、1日1時間で15分毎に遠くの景色を見ることにするよ！ これなら目に負担は掛からないよね？ 身体に悪いから寝る時間も気をつけよう。夜9時に寝て、朝6時に起きるんだ。うん、健康的だね！ 君の言うとおり命を大事にすることにするよ！」

なんて『無理』である。

不憫な国には、支援すべき！ という声は今も昔も変わらず存在した。

ただ、はつきりいつて先進国にとっては『どうでもいい』話で、本心としてもいきなり言われても困るし、対岸の火事でもある。国家として主張するなら、無為に介入すべきでもないし、むしろそのまま收拾不可能になったのは政府（機能しているかは別として）の指導が間違っているだけの話で、むしろ有能な人物や物資を送り、国を再生するとして

困るのは現地人の人でしょ？ 半植民地化されてもいいの？ 無
論、助けるのは訳ないけど無料では支援しないよ？ 当然、資源は
ごっそり頂くし、自分たちに都合のいいように法整備もするし、場
合によっては宗教も変えるかもね。

それでもいいの？

それともう『君たちの国』じゃあないよね。

だから僕たち寄付しか出来ないよ。金だけは善意の人や国から少し出してあげるから自分達で頑張つてね。

ゴメンね。

というのが先進国の所謂『都合』である。つまり、簡単に言えば、各々正しいと思つた道を行き、正解だつた国が先進国であり、間違つた国が発展途上国だつただけの話で、テストの問題が分からないと嘆いている人に、「答えを教えてあげてもいいけど、自分の為にはならないよ？」言っているのと同じである。

しかも、テストのようにYES、NOで分けられるのなら、まだやりようがあるが答えは複数、しかも膨大な正解数がある。

それを「これが正解だ」「いや違うね」と未だに戦争という手段で戦い続けているのだから、これでは助けようが無い。

もうそういう段階ではないのだ。完全に国家が消滅するか、自力で復興するしか手が残されていない。武力や政治（資源を巡つての介入は存在するが、言つてしまえば商売の範疇から出ない）などの介入は途上国の上層部は考えてやりくりしているのだから、恐らく国家の運営に携わる人は日本の学校の1クラス分にしかならないだろう。

それほど、切実で、無知であるのだ。

さて、字や他の国の事柄を長々とトリヴィアしたわけだが、結局

のところ最初の問題に戻る。「もし、この『平和で当然の生活』が根底から覆されたら？」である。

識字率うんぬんというのは、貧富の差を再確認して欲しくて、言っただけじゃない。

現代においてのアフリカ諸国レベルの識字率を、日本では文献によれば14世紀頃には既に習得して一（正確な調査は明治時代に行われたものがあり、男89%女39%という結果。男尊女卑が当然の時代にほぼ仕事でしか使用しない字を、およそ女性の4割は理解していて、しかし字が必要な職を女性が選べた時代ではなかった、また職というのも現代みたく第三次産業、サービス業なんてあってないようなもので、もちろん主流は農業などの第一次産業が主流だった）、今日における日本の識字率の高さは、それに加えて江戸時代で培った土壌のおかげであり、文化は開国以来、急激発展してきた。

ここで注目して欲しいのが、つまりは字という物が『当たり前』になってから、最低でも200年は立っていることだ。

つまり、知ろうとすれば量や質には多少目を瞑っても『情報』は手に入るし、嘘か真か分からなくても後世に伝えることも出来る。それが単純に人生50年として、4世代も正確に伝えることが出来る。そして量はより膨大に、質は輝くほどに良質になっていく。そこが他の国と決定的に違う差だ。

そんな国が、情報が出揃えば、後は金儲けに走るか、戦争を仕掛

けて資源を奪うかの二択になり、日本は1945年を最後に、戦争を放棄した。刀を捨てる代りに、平和を手にした。

諸外国でニヤニヤされながら頭を叩かれても、「V-J Day!」（ヴィクトリーインジャパンデー）など言われても、笑顔を絶やさず、闘争は捨て、経済会で懸命に走りぬいてきた。その結果が現在の経済大国日本である。

わずか半世紀程、戦争を放棄した日本は確かに平和になった。もう殆ど戦争を知る者はいない。九段下の英霊の元へ酒を持って遊びに行ったのか、普通に地獄へ落ちたのかは分からない。

されど半世紀、戦争を捨てた国が、その世界最強といわれた戦艦や軍隊を次々となぎ倒し、「アジアの盟主」と言われた国が1945年にその牙を自ら粉々に砕き割り、それまで「お国のため」と命を散らしていった兵士に涙を浮かべて唾を吐きかける。

しかし、国民の為に資源も満足にない、他国に頼るしかない、莫大な借りをこれから返し続けなければならぬと、ゲームでいう『詰んだ』状態のこの国の上層部は、拳銃を啜え引き金を絞るだけで、この苦悩から開放されるといって、誘惑に何とか耐えてきた。

その判断は間違っていない。ただ、戦争を、戦うという事を忘れるのには十分だったという話だ。

そして今や手にするものは刀や銃ではなく、鉛筆やパソコンに変え、時代は変わっていく。

今では「FPS」（ファーストパーソンシューティング、一人称視点射撃ゲーム）「TPS」（サードパーソンシューティング、三人称視点射撃ゲーム）などの戦争ゲームで、「LV45」、大佐に

なった！」と喜ぶ者や、口癖のように「死ねっ死ねっうざいんだよ」と呟きながらゲーム画面でアサルトライフルを連射する若者も珍しいものではなくなった。

日本は世界でも有数のゲーム大国でもあり、無論、ゲームも字が分からなければ理解するのにも時間がかかる。

つまり、日本にある殆どの施設、娯楽、仕事は、言うまでもなく字が大前提であり、前提として持ち上がるのもバカバカしいものがあると思うのは現代人の感覚として間違っていない。

字を学ばない事で相対的に可能性という物を削ぐという事は前述したが、それを踏まえて言えば今の日本は可能性の塊である。

国家としての成長は先進国諸国全体にいえる事で、軒並み頭打ち感があるのは否めないが、人間個人としての伸びしろ、成長性、将来性、経済大国としての国際的信用はやはり不況といわれる日本でも他の先進国に比べて頭1つ抜き出ている。

なにしろ、「勉強できない」なんて事がありえないのだ。調べれば幾らだって情報は転がっているし、自ら望まなくても、「宿題」というありがた迷惑なものも学校で完備している。

よく学校長や偉そうな人が「可能性は無限です！」等と講釈を垂れるが、日本では周りの人間が自分と近いスタートラインに立っていて、義務教育という日本人なら誰もが受けるコースを延々と9年間、最高学府まで行けば16年も皆が基本的に付かず離れずの距離を走っていて気付かないが、ある日「あれ？ 皆で足並み揃える必要ないんじゃないかね？」と、気付くものがある。

「可能性は無限」という言葉に触発されたか、はたまた自然に気が付いたかは分からないが、高校や大学などにも同じコース、殆ど変わらない速度で走っているのにも関わらず、何故かもう背中がぼ

やけている人が少ないが確実に存在する。

それを才能というのなら何と素晴らしいことであるか。そしてその背中を見つめたままボーっとしている人間が存在する事が大多数である事が、何と残念なことであるか。

ある意味、足並みを揃えて皆で渡ろう！ という『平和の弊害』なのかもしれない。

競争より協調。

スタートラインが生まれたときから天と地ほどの差があり、一生掛かっても覆されないような壁が2枚、3枚ある事が、さほど珍しくない日本以外の国はとにかく走るしかない。

一步踏み出せば即死亡に繋がる細い幻のような道を、後ろも見ずに走っていく。

いや、走るしかない。

止まれば死ぬしかない。

道を踏み外しても死ぬしかない。

才能を伸ばすなんて持ったの外、前しか向けず、「生きるか死ぬか」を地で行く国と、「みんなからちよつと変な目で見られるけど走ってもいいのかな？」などと心配する日本では、どちらが『生きる事が出来るか』もう一目瞭然だろう。

というわけで『もし、この『平和で当然の生活』が根底から覆されたら？』の答えは

『論じるまでも無い質問。この平和な国で平和ボケはあっても、これまで培った歴史がそう簡単に吹き飛ばわげが無い。他の戦争を仕掛けそうなアメリカ、中国、ロシア等なら質問の意図、意味する所は理解できるが、日本で、しかも高校生の僕に言っても意味がない。ついでにオチもない』だ。

現実逃避を10秒ほどした所で、僕は再び、2階の教室の窓から
校庭の様子を確認する事にした。

やはり現実だった。

とにかく、なんで平和な日本で？　なんでこんな所で？　なんで
僕たちの目の前で？　とかいろいろ考えながらも、僕は机に向って
吐いた。

平和を願って

遠くを見るという事は、もちろん対象が遠くに設置されていて、それを限定的に認識、把握する行為他ならない。

それが人物にしる、建物にしる、漠然とした景色にしる、遠くを見るという事は、何かしらの目的がある。

見るという事は、日本語で言えば、観察、確認、警戒などの意味で使われ、物事を認識する上で重要な行動の一つである。

人間というものは認識の連続で成り立っている。

つまり、朝起きれば、殺してやりたくなる目覚まし時計が音を立て、布団を恋しく思いながらも涙ながらに別れを告げ、自室のドアを開けて、リビングに出れば家族（僕の場合は髭をこれでもかど蓄えた30のオッサン）に「よう、今日は早起きじゃないか。こりゃ今日はガンダムでも振るんじゃないか？」と、皮肉を言われ、その皮肉にすら飽きた僕は「どうせなら美少女にしてほしい所だよ、叔父さん」と使い古された言葉を返す。

窓をあけて、目覚めの一本と、タバコに火をつけ、「タバコなんて今時、流行らないぞ」という有難い助言を今日も無視して、遠くを見れば、「今日も日本は平和」だ。

そう認識する。

何一つとして昨日の朝に比べて欠けているものがない。

平和すぎてタバコを吸って自ら寿命を縮めているほどだ。

今までのひとつひとつの行動が、僕の『在るべき平和』で、今まで、一瞬たりとも程度の違いさえあれ、変わる事はなかった。

そうなると、僕は『昨日と同じように』学校へ行く準備を進め、「今日は遅くなるから、1人で何かいい感じに過ごしてくれ」と翻訳家である叔父の何時もながらのはつきりしない、よく翻訳なんてインテリな仕事が勤まるものだと思議にすら思う、お留守番命令に嬉々として受け入れる。

お留守番代として5千円を握り締めているのは文字通り『お約束』だ。

「無駄遣いすんじゃないぞ」と若者が無駄遣いせずして誰が無駄遣いするのか？ という疑問はさておき、僕は何時も通り学校へと向った。

遠くを見るという事は別の意味でも日本では用いられる。

一つが「諦観」と言う意味。

ものごとを諦め、どうしようもない時、天すら仰ぎたくなるほど哀れな時に対象を直視したくない気持ちで遠くをみる。

もう一つは単純に対象に興味がないとき。

その対象を見続けたところで何も得ることがなく、ただ遠くを見ていたほうがよっぽど有意義に生きられると判断したときだ。

他にもいくつがあるが、僕の今の状況を表すとすれば、第一に後者であり、その結果としての前者であった。

教室内の黒板では、英語で「あれはトムですか?」「いいえ、キヤシーです」と中学レベルの英語の授業の様子が伺えた。

伺えたと言うのは、授業が始まってからすぐに僕が窓を見続けた

せいで、授業が始まる40分前は確かに僕はまっさらで新品同様の英語の教科書を用意したはずで、仮に、途中から数学の授業にすり替わっていたとしても、僕には知る由もないほど僕は授業を真面目に受けていなかった。

誤解のないように言っておくが、理解できないから授業を投げ捨てたのではない。僕は英語が得意だ。

得意と言うか、日本語より『慣れてる』。

叔父さんに言わせれば「まあ、高校レベルではないが日本の中学レベルだとは思う」とのことだが、僕にとっては「ことばのおあそび」レベル。

幼稚園で習うような英語レベルを高校に来て学ぶとは思わなかった、とは僕が編入して最初の事件だ。というのも僕が帰国子女で、編入した先の学校の学部が、超が付くほどのバカだったことから。

この東城学園では学力によって3つの校舎、5つにクラスに分けられ、『特進』やら『準特進』やら言い方はあるが、生徒たちの言葉を借りるなら、一番高級で神殿のような校舎を独占する「天才」。ほかの公立高校とさほど変わらない校舎を持つ「頭でっかち」と「普通」。

校舎の壁に今日も現代アートを増やす不潔で汚い我等の校舎の「バカなパシリ」と「本気を出すとか格好わりーじゃん？」の5つという素敵な「区別」だ。

「天才」クラスの人たちは一番下の僕のクラスからしても、雲の上の存在であり、全国模試で上位200人中50人は東城の「天才」達によるものだ。

何を食えばそんなに賢くなれるのかと疑問を抱くことすら飽きる事になるのは僕だけではなく、一番卑屈で嫉妬深く、また頭がスポンジのようにスカスカな僕らのクラスでさえ「ああ、もういいよ天才で」と何故か上から目線で格付けをするに至る。

「頭でっかち」や「普通」はまだ何とか着いて行ける範囲で、「天才」達のような、「4次元」の存在ではなく、自分たちの把握できる範囲に生きていることが証明されている。

というのも、勉強の差では如何ともし難い差があるが、運動や部活ではそれなりに食いついているというか、勝っている点がある。純粹に勉強が苦手な生徒や、部活一筋でやってきました、という生徒も少なからず存在するため、部活もせずただ勉強できるだけでは、「頭でっかち」「普通」という評価もあながち間違っではないのではないだろうか。

むしろ、一番酷いのは「バカなパシリ」クラスで、一言で言えば、「中途半端」。

光る所が一つもない。ただ墮落して生きているのが廊下で擦れ違っただけで、その腐った目をみれば理解するのは難しくない。

また学校に於いて特殊なステータスの一つ「不良」でもないため、普通に僕らのクラスを怖がる。

僕らのクラスの所謂「番長」に顎で使われる生徒の比率が一番多いクラスがやはり「バカなパシリ」になってしまつのも、中途半端故か。

そんな東城学園にも「最高でサイキョーなクラス」といえば、僕らのクラスで間違いない。

何を以って「サイキョー」なのかは入学してから2年間、それなりに関心を持って調べてきて未だに結論を出せずにいるが、曰く、「自由で笑顔の絶えないクラス」。

基本的に授業時間は麻雀や、各種趣味の時間と僕たちのクラスは割り切っており、数名、目の焦点が定まらないほどのオーバーードズで「うひゃひゃ」と確かに笑顔が絶えない。

曰く、「部活にて目覚しい活躍を遂げる」。

ごく一部の生徒が、部活などに置いてその才能を発揮する事が、稀にある。

しかも、不思議な事にそのような生徒に限って、部活の部長を務めたり、非常に優秀な成績を収めたりする。

世の中と言うものは本当に不思議なものである。

その生徒の存在にしる、その生徒の活躍をまるで自分の事のように自慢する奴の存在にしる。

因みに、この学校特有の非公式部活として、「喧嘩部」という名前だけで頭が痛くなってくる部活が存在する。

もちろん在籍する生徒の大半が「本気を出すとか格好ワリーじゃん？」という連中である。

喧嘩部の活躍は目覚しいものがあり、東に行けば、誰かを顔面陥没させ、西にいけば、誰かの腹にブスリとナイフを突き立てた。

さらに、最近、悪知恵を働かせたのか、学校の掲示板に堂々と、「復讐代行します！ 殴りたいけど殴れない……そんな貴方に！ 1万ポッキリ！」と商売まで始め、笑えるのが人に聞いたところによると、それなりに成り立っているというのだから、確かに「目覚しい活躍」といえばそうなるだろう。

そんな、僕のクラスでまともに授業を受けるといふ事が、どれだけの意味があるのか。

むしろ、授業中ですら当然のように携帯を弄る女生徒や、机をくつつけて、「ロオン！」と麻雀に忙しい男子生徒が混在する中で（無論、私語禁止なんてノリがワリーのは禁止、とのことだ）勉学に打ち込むという事は、もはや神にしか許されない所業なのではないか。

僕は、何時ものように「言語以外にも真面目に勉強すべきだった」と思いながら、しかし、「ことばのおあそび」には興味はなく、この教室の状況に「諦観」するのだった。

窓際、一番前の席。僕の席だ。

これほど注意力散漫になる席はない。

それは窓際、一番後ろの席なのではと思う人もいるかも知れないが、ほかの学校なら、「先生にあてられない」とか、「昼寝の絶好スポット」等と、創作ですらこの定義が適応されるほどの人気スポットだ。

授業熱心な先生もそこは要注意スポットとして監視しているだろう。

とはいえ、ここは「本気を出すとか格好ワリーじゃん？」。もちろん先生も本気を出してない。

目の前には教育現場としてあるまじき行為がそこらじゅうに蔓延しているにもかかわらず、柳に風を体言するかの如く、目の前の問題をことごとく無視して先生は授業を続ける。

年々領土を拡大している先生の頭皮の薄さは、やはり精神的にアシなのだろうが、僕にとっても知ったこっちゃないので「可哀想で

すね」「と心の中で呟いておく。

ご存知の通り、授業環境の劣悪さ、生徒の授業態度、先生の授業態度、話し声、麻雀の打牌音、ケータイの着信音。ついでに、先生の頭を反射する光。

これだけでももう麻雀でいう「倍満」レベルなのに、一番前の窓際と言う、そもそも、黒板が見づらい、隣接する席が少ない。この教室内に於いては筆舌しがたいほどに素晴らしい景色が広がる窓の傍。

「役満」である。

何故僕が、窓の外を見続けているのか理由は察してもらえたはずだ。

ただ、僕が外を見ている理由がもう一つある。

うつすらとしか分からないが、火事が起きている。そう遠くはない。しかも3件もだ。

僕は授業が始まってから10分後、つまり午前11:30程に火災を確認している。

窓を見続けた僕が言うのだから間違いない。

煙がすすくすすく成長するかの如く、薄灰色の煙が3本柱に立ち上り、ある高さでその柱は四散していった。

まあ、これだけならあまりお目に掛かれないものを目にした、で済むのだが、奇妙な点が時間を経ていくつか見つかる。

一つは消防車の音が聞こえない事だ。

ここ東城学園と火災発生地点と思われる場所は同一区とみられ、さらに消防署はこの学校を中心にして火災現場の丁度反対側、この学園が大通りに面していることもあって、学園を通り過ぎずに消防車が火災現場に向かう事は、この地区に2年ほどしか住んでいない僕だが、どう甘めに見ても10分以上のロスが発生する。

日本の公共機関が10分遅れるなどの大失態を犯したら、良くてゴシップ記事の一面。悪くて国营放送（NHK）の全国ニュース速報だ。

楽観的にみて、大通りが渋滞していて、仕方なく隣接区の消防署に応援を頼む、なんてこともあるかもしれない。

そのせいで消防車の音が聞こえませんでした。一応、道理は通る。ただ、現在の時刻は12時ちょうど。煙の量が最初は小枝ほどの細さだったものが、今では屋久島の大自然が誇る大木ほどの太さになり、どす黒く空を汚す煙は、ついに窓のガラスに張り付いて上を見上げなければならぬほど煙は成長し続けている。

しかもその大木の傍では新たな4本目の煙が静かに立ち上り始めていた。

いくらなんでも30分以上も放置されるなんて珍しい。こりゃ明日はBBC（英国国营放送）を久しぶりに見ることになるかもしれない。

しかし、本音を言えば火災現場にいる人たちには申し訳ないが、こちらはただの傍観者である。煙が増え続けるだけで、僕らのクラスが驚くはずもない。

というか未だに気付いていない。

ぱっと周りを見渡したところ、すやすやと自分の世界に旅たっている者が、半数。

残りの半分は麻雀、携帯で忙しい者。

ごく一部にノートと教科書に四苦八苦している様子が伺える者が数名。

慣れてるとはいえ、周囲の変化に鈍い奴らだとは知っているため今更驚かない。

むしろ、こんなにつまらない授業にごく少数とはいえ、真面目に授業を受けている奴がいるとは明日にはガンダムでも降るのではないのか、むしろ僕が早起きしたせいで、このような事態になっているのではないか、と自責の念まで出る始末だ。

隣の席である金髪で、いかにもケータイ小説の主人公をそのまま現実引っ張ってきたかのような女子とはあまり親しくもないため、この異変の感想を聞くこともできない。

ならば、と引っ張り出した携帯で、もしかしたら火事の情報や消防署の失態がニュースサイトのトップに並んでいるのかもしれない、と携帯でインターネットに接続する。

接続すれば最初の画面が検索エンジンも兼ねるニュースサイトになっているのは、携帯を買った当初からの設定になっているのでそのまま使っている。

と、いつもは2〜3秒で消える「読み込み中」の画面が一向に進まない。

しばらく待つと回線が混雑しているとの旨が携帯から報告される。ここまでは良くありえることで、携帯を散々弄繰り回し、画面を頻繁に切り替えたりすると、携帯内部の処理が追いつかなくなり、その結果インターネット通信が安定しなくなる事がある。

今の最新機種ではそれもほぼなくなつてはいるが完全になくなるという事がないのは携帯を持つ人間なら当然の知識だ。

また、接続しにくい状況として1番に挙げられるのは、大晦日やクリスマスなどの、国または国際的な行事におけるお祝いの電話やメールがある。

しかし今は夏休み手前の、クソ暑い雲ひとつない昨日と変わらなただの一日だ。

誰がこんな忌々しい日にお祝いメールを送ると言うのか。とてもそうとは思えない。

災害などで一時的に繋がらない事もあるが、それはアンテナの破損などによる電波そのものが届いていないことになるので、素直に携帯の表示は「圏外」となるが、こちらの携帯は見ての通り三本線のまま動く気配すらない。

つまり、携帯から最寄りのアンテナ、中継地点には届いてはいるがそこからの通信が途絶、または絶え間なく届く膨大な電波を処理し切れないためパンクしている状態と考えるべきか。

しかし、変わった事といえば、窓の外に四つの柱が立っているのみである。

火災現場にいる人達にそういった電波障害は考えられても、少なくとも1キロ以上は離れている、ましてや公共機関でもある学校に於いて、電波障害などとは考えづらい。

と、消去法であらゆる可能性を潰してはみたが、どれもしっくり来ない。

いや、物語、とりわけ国が沈没するだとか、バイオハザードであるとか、開戦前日であるとか、ギャグを通り越してむしろシユールな理由ならば幾らでもでっち上げられるのだが、はつきりいつて現実的ではない。

もしかしたら携帯代を払っていなかったのかとすら考えたが、そういうのは昨日コンビニで払っていた事をすぐに思い出した。

そういった推論をああでもないこうでもない頭を捻り、すこし冷静になってみると、周りの雑音がすこし困惑している空気になっていることに気がついた。

どうやらその困惑の空気は「やっぱり繋がらないね」「アキもだめだつてさ」と、携帯を片手に不満そうな顔を浮かべている生徒が数名確認できることから、僕がこの事件を考え出した前後で形成された空気と推察でき、未だ誰もが打開策を提示できていないことを証左していた。

現在の時刻は12:05。

授業終了まであと5分ほど。

この時間帯となれば、どんな進学校と言えど昼食の事が頭にちらつく筈だ。

このクラスも例外ではなく情眠を貪っていた約半数の生徒も、機械の如く起き上がり、目がぱっちりと見開いていた。

気が早い者はもう弁当を広げてパクパクと昼食をとっている。

僕は昼食の事なんて今はどうでもよかった。

はつきり言つて可笑しい。

こんな事があるはずがない。

通信が途絶した状態で、情報得られない。
また、見る限り公共機関が働いていない。
柱はついに4本から6本になった。

それだけならまだ、刺激的な日々で済む。

なんだ？ どういうことだ？

何故、今若いカツプルが校門を飛び越えてきた？

は？ それを追いかけてる「人」っぽい奴等はなんだ？

え？え？え？ 何故、2人に襲い掛かる？

何故『噛み付く』んだ？

カニバリズム？

ばか馬鹿しい、でもなんで？

今、なんでそれを見せ付ける？

いや、何故学校の校庭でやるんだ？

ああ、腸を口で引きずり出さなくてもいい。グロテスクだろ？

現実であるはずがない。

ありえない。

馬鹿な事だ。そうだ、これは馬鹿な事だ。

馬鹿な事はしちやいけないよと子供の頃に躰けられる。

奴等は守っていない。そうか、これは現実じゃあない。

恐らく映画の撮影だろう。最近の特殊メイクは本物よりエグイな

あ。本物を見たことないけど。

そりゃそうだ。

そうとしか思えない。

恐らく映画に使う機材が電波に悪影響を及ぼすから電波が繋がらないんだろう。

あれ？ それって飛行機だっけ？

よくわからない。わからなくなってきた。現実じゃない。

現実？

そう現実という物を考えてみよう。

現実を受け止めてこそ『生きていく』と言える。

この日本の現状と今を照らし合わせて、残ったものが真実だ。

現実逃避だ。いや『現実逃避するんだ』。

現実逃避を10秒ほどした所で、僕は再び窓から校庭の様子を確認する事にした。

やはり現実だった。

とにかく、なんで平和な日本で？　なんでこんな所で？　なんで僕たちの目の前で？　とかいろいろ考えながらも、僕は机に向って吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8135q/>

平和な国のとある末路

2011年10月8日18時13分発行